

明神 太郎 さん テスト分析レポート

中学3年生 社会 2017年5月 1学期中間テスト

72 / 100点 得点率 **72%**

学校の採点区分 意欲関心 10/10 思考判断表現 12/22 技能 14/22 知識理解 36/46

目 全体所見

今回の社会（1学期中間テスト・地理歴史公民総合）は72/100点でした。提出物への取り組みを示す意欲関心は10/10と満点で、ASEANや排他的経済水域、EURO・OPECといった一問一答形式の用語問題もほぼ全問正解しており、知識理解（36/46）は着実に得点できています。一方で、資料や年表を読み取って答えをまとめる技能（14/22）、そして理由や経緯を自分の言葉で説明する思考判断表現（12/22）でまとまった失点が見られ、この2つが今回の重点分野です。

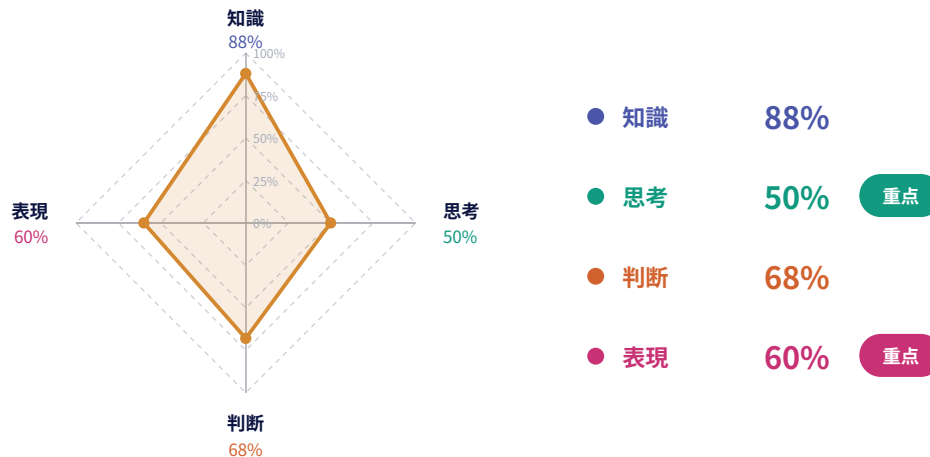
答案から見た傾向

- 地名・国際機関の略称・歴史用語など、暗記して答える一問一答形式の設問はほぼ全問正解しています。地理・歴史の基礎的な語句はしっかり定着しています。
- 選挙権の要件（納税額・年齢）や条約の内容など、年号や数値を正確に覚えて答える設問で一部誤りが見られます。似た数字を持つ制度同士が答案の中で混ざっている様子がうかがえます。
- グラフや年表・資料を読み取って理由を説明する設問、出来事を年代順に並べる設問で失点が集中しています。個々の知識はあるものの、複数の資料を関連づけて整理する場面にやや課題が見られます。

明神 太郎 さん 2017年5月 1学期中間テスト (社会)

4観点の得点率

「重点」の2観点を下段で解説しています



観点別アドバイス

思考 今回の重点

複数の資料を突き合わせて理由を導く設問での失点が集中しています。資料Aと資料Bが並んでいる問題では、片方だけを見て結論を決めた跡が残っていました。答えを書く前に「どの資料のどこと、どの資料のどこを比べたか」を余白に一言メモしてから解答をまとめる習慣をつけると、根拠の抜けが減ります。

表現 今回の重点

記述問題では、結論は書けているのに理由が一言で終わっている答案が複数ありました。また「漢字四文字で」といった書き方の条件を満たしきれていない解答も見られます。内容は合っているだけに、書き切る前の一手間で得点になる部分です。

学習アドバイス

全体として72点。地理・歴史の用語を覚える「知識」はすでに88%と高い水準にあり、これは今回いちばんの強みです。一方、資料を比べて理由を導く「思考」が50%、条件に沿って文章を書き切る「表現」が60%と、この二つに失点のはっきり集中しました。覚える量を増やす段階はすでに過ぎており、次は「持っている知識をどう組み立てて、どう書き切るか」に学習時間を配分していくのが最短の道になります。次のページで、その内訳をもう一段掘り下げています。

明神 太郎 さん 2017年5月 1学期中間テスト (社会)



つまずきの深掘り分析

得点ではなく、「なぜそう答えたのか」を答案の痕跡から読み解いています。



誤答パターンの原因分析

間違えた設問を並べてみると、誤答は大きく三つのパターンに分かれます。一つ目は、資料が二つ以上並んでいる設問で、片方だけを見て結論を決めているものです。資料Aと資料Bを突き合わせて答える問題で、Aだけを根拠にした跡が残っていました。二つ目は、結論は正しいのに理由が一言で止まっているものです。記述問題で「〜だから」までは書けていても、その先の「だからこうなる」まで届いておらず、採点上は説明が不十分と判断されています。三つ目は、数字をとまなう制度の知識で、似た数値どうしが混ざっているものです。衆議院議員選挙権の要件を「1875年・満26歳以上・地租10円以上」と書いていますが、正しくは「1889年・満25歳以上・直接国税15円以上」で、三つの数字がいずれも近い値にずれています。覚えていないのではなく、複数の制度の数字が頭の中で一つの棚に入っている状態です。いずれも知識の抜けではなく、覚えた知識を「比べる」「書き切る」段階で短くなっていることから生じています。



根本的なつまずき

共通しているのは、「考えを途中までしか形にしていない」ことです。頭の中には正しい見通しがあるのに、ことばや式に書き出す前に答えを決めています。そのため、根拠が二つ必要な問題で一つだけで判断し、記述では結論だけを書いて理由を省略します。一問一答形式の設問で88%取れていることが、その裏返しの証拠です。答えが一つに定まる問題では力を発揮できる一方、自分で手順を組み立てて書き出す必要がある問題になると、その手順が省略されます。逆に言えば、途中の考えを残す習慣がつくと、今の失点の多くは同時に改善していく見込みです。



前提知識の欠落

公民分野の年表問題（朝鮮戦争・高度経済成長・東京オリンピック）と、歴史分野の明治期以降の流れが、別々の単元として頭の中に置かれています。日本の近現代を一続きの時間として扱う感覚が、まだ育ちきっていません。選挙権の要件で年号を取り違えたのも、ここにつながっています。夏期講習の初回に、明治維新から戦後までを一本の年表に置き直すところから短く戻って確認し、そのうえで資料の読み取りと記述の練習に入ります。

明神 太郎 さん 2017年5月 1学期中間テスト（社会）

| 学習メニュー

上から優先度の順に並んでいます

1 根拠を二つメモしてから答える練習

15分 / 回

資料やグラフが二つ並んだ問題を1日1問。答えを書く前に、使った根拠を二つ余白にメモしてから解答します。メモなしで解いた問題は、正解でもやり直します。

資料の読み取り

思考

2 記述を「～だから～」の型で書き切る

20分 / 回

記述問題を週3問。解いたあとに解答例と見比べ、足りなかった言葉を赤で書き加えるまでを一セットにします。字数・漢字指定は解く前に丸で囲んで確認します。

記述の基本型

表現

3 明治～戦後を一本の年表に戻す

10分 / 回

ノート見開きに1本の年表を引き、明治維新から高度経済成長までを書き込みます。数字を含む項目（選挙権の要件・条約）は年表の上に赤で並べて確認します。

近現代史

年代の整理

| 学習アドバイス

今回の課題は覚える量ではなく、覚えた知識の使い方にあります。そのため夏の学習は、新しい暗記よりも「すでに知っていることを比べ、書き切る」練習に時間を配分します。上のメニューは優先度順ですので、時間が取れない日は1番だけでも十分です。書き終わりに条件を30秒だけ確認する習慣もつけていきましょう。



太郎さんへ

ASEANやEURO、ナイル川など、覚えるべき用語はほとんど完璧でした。知識はもう十分にあります。あと一步、考えたことを言葉にして書き切れば点数になります。その書き方は一緒に練習していきましょう。